

第17回教育委員会会議

1 日時 令和3年10月12日（火） 午後3時30分～午後4時30分

2 場所 大阪市教育センター5階 講義室

3 出席者

山本 晋次	教育長
森末 尚孝	教育長職務代理者
平井 正朗	教育長職務代理者
巽 樹理	委員
大竹 伸一	委員
栗林 澄夫	委員
多田 勝哉	教育次長
塩屋 幸男	東住吉区担当教育次長
大畑 和彦	都島区担当教育次長
大継 章嘉	教育監
三木 信夫	理事兼政策推進担当部長
川本 祥生	総務部長
忍 康彦	教務部長
福山 英利	指導部長
松田 淳至	学校力支援担当部長
村川 智和	総務課長
本 教宏	教職員人事担当課長
三嶋 賢慶	保健体育担当課長
中道 篤史	初等・中学校教育担当課長
松浦 令	教育政策課長
有上 裕美	教育政策課長代理

ほか指導主事、担当係長、担当係員

4 次第

(1) 教育長より開会を宣告

(2) 教育長より会議録署名者に異委員を指名

(3) 案件

議案第95号 第46回学校医等永年勤続者表彰について

議案第96号 第73回市立校園職員児童生徒表彰について

議案第97号 令和3年度教育功労者表彰について

協議題第24号 大阪府新学力テスト（小学生すくすくウォッチ）について

なお、議案第95号から第97号、及び協議題第24号については、会議規則第7条第1項第5号に該当することにより、採決の結果、委員全員異議なく非公開として審議することを決定した。

(4) 議事要旨

議案第95号「第46回学校医等永年勤続者表彰について」を上程。

松田学校力支援担当部長からの説明要旨は次のとおりである。

学校医等永年表彰については、学校医等永年勤続者表彰実施要項に基づき、本市校園の学校医、学校歯科医、学校薬剤師として20年以上、校園における保健管理に関する専門的事項に関してご尽力いただいた方々に対し功績を称えるために、表彰を行い、表彰状と記念章を授与するものである。学校医としては、賀来清高先生をはじめ24名、学校歯科医としては、今川信吾先生をはじめ13名、学校薬剤師としては、生島明美先生をはじめ8名、以上、45名である。

表彰期日については、11月3日の文化の日で、表彰状等については、校園長より受賞者へ渡すことになる。

採決の結果、委員全員異議なく、原案どおり可決。

議案第96号「第73回市立校園職員児童生徒表彰について」を上程。

忍教務部長からの説明要旨は次のとおりである。

本件は、大阪市表彰規則及び大阪市教育委員会表彰規則に基づき、市長と教育長の連名で行っている表彰で、本年度で73回目となる。

はじめに、校員職員が対象の、職務精励である。これまで長年にわたり、日々、職務に精励し、教育の発展・向上に寄与し、功績が多大である者を表彰しており、今回は33名である。

次に、教育実践功績である。これまでに、教育実践上の功績が多大であり、保護者・地域などからも高い評価を得ている者を表彰してきており、今回は1名と1グループである。

次に満25年以上、大阪市立校員に勤務した者、いわゆる勤続25年表彰である。今回は24名である。満35年以上、大阪市立校員に勤務した者、いわゆる勤続35年表彰については、今回は178名である。

さらに児童生徒が対象となる、他に称賛され、または他の模範とするに至る行為があった者であるが、今回は4名と1グループである。いずれも全国レベルのコンクール・大会で優秀な成績を収めた者である。

校員職員の調査研究等であるが、今回は該当者なしであった。

最後に、表彰式については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2年連続となり、たいへん残念ではあるが、中央公会堂では行わないこととし、各学校園での実施をお願いする予定としている。なお、表彰はいずれも令和3年11月3日付けで行うこととする。

採決の結果、委員全員異議なく、原案どおり可決。

議案第97号「令和3年度教育功労者表彰について」を上程。

忍教務部長からの説明要旨は次のとおりである。

こちらの方は、大阪市教育委員会表彰規則に基づき、教育長名で行っている表彰である。今回は21名である。校員長については、3年以内であるが校員長などの職を務め、本年度末をもって退職となる方が10名、副校員などは、本年度末をもって退職となる方が11名である。同様に表彰式については、残念ではあるが、本年は行わないこととして、各学校園での実施をお願いする予定としている。表彰日は、同じく令和3年11月3日付けで行うこととしている。

採決の結果、委員全員異議なく、原案どおり可決。

協議題第24号「大阪府新学力テスト（小学生すくすくウォッチ）について」を上程。

福山指導部長からの説明要旨は次のとおりである。

本テストは、今年度より大阪府教育庁が市町村教育委員会との連携のもと、大阪の子どもたちが学びの基盤となる言語能力や読解力、情報活用能力等を向上させ、これからの予測困難な社会を生き抜く力を着実につけることと、子どもたち一人一人が自らの強みや弱みを知り、今後の目標を持つことの2つを目的に、小学校第5、6学年を対象に行った。昨年度、本テストに本市が参加するにあたり、教育委員の皆様から慎重なご意見や、市会においては陳情書が採択されたことも踏まえつつ、教育委員会会議において、複数回の協議を重ね、参加することを可決いただいた経緯がある。それ以降も、府教育庁と継続的に協議を重ねて、今年の5月末に市内全学校、分校も含めて、287校の5年生、6年生、約3万7千人が本テストに参加した。8月末に結果が教育委員会及び学校、子どもたちに返却されたところである。

本日は、今年度の実施概況をご報告させていただきたいと思っている。今年度の実施状況についてであるが、昨年度、教育委員の皆様からいただいた主な懸案事項としては、コロナ禍の学校状況における子どもたちや学校への負担であるとか、本市で従前より行っている大阪市小学校学力経年調査に加えての参加になることから、重複感やすみ分け、このコロナ禍、限られた時間の中で、学校の授業における学習活動の重点化といった特例的な対応が行われている中での、新学習指導要領で新たに示された教科横断的な視点からの教育課程の実施などであった。とりわけ、子どもたちや学校への負担については、教育委員の皆様が懸念されていたところであるが、実施日については、5月26日から6月8日の約2週間の期間内に各学校の実情に合わせて、実施日を設定することができた。全国学力・学習状況調査と同一日に調査を実施した学校は、5年生6年生ともに約半数あるが、それ以外の半数の学校については、教科とアンケートを2日間に分けて実施する学校や、学年で実施日を分ける学校など、様々な実施の状況があった。いくつかの学校から聴き取りを行ったが、児童への負担を考慮しながら実施できたことや、複数日に分けて実施できたことは負担軽減に繋がったなどの意見を聞いている。また、実施後の個人票の結果提供においても、学校からは児童の強みや、これからつけていく力が具体的に記載されていたので児童の励みになったことや、子どもたちがつけるべき力をどのように育成すべきか、学年で

議論できたなど、その分析結果をもとに個々の児童への教育指導や学習状況の改善・充実に役立てることができたと考えている。今回参加してみて、心配していた学校や子どもたちへの負担については、学校の実情に応じて一定期間での実施が可能であったことから、一定軽減されたと認識している。

今年度本市の結果概況であるが、実施期間が2週間程度あったことから、正確な比較はできないものの、平均正答数を見ると全体的にはほぼ府平均であり、理科においては府平均を上回っている。教科横断的な問題については、コロナ禍でそれへのアプローチが十分にできていない中で心配していたが、平均正答数を見ると、5年生6年生ともにほぼ府平均にあった。これは対象校を拡充して取り組んできた学力向上推進事業や、全小学校へブロック担当指導主事が訪問する学力向上サポート訪問などの取組により、国語、算数の基礎学力の定着が図られ、教科横断的な問題にも一定対応できたのではないかと考えている。なお、教科横断的な問題は、5年生6年生同一の問題であった。続いて、大阪府の児童の正答数分布の状況から、高い順におおむね25%になるように区切り、区分Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳと分けた際の、区分Ⅳに該当する児童の割合を、本市と大阪府との差を比較した資料になっており、この資料からも読み取れるように、学力に課題のみられる児童の割合については、大阪府平均より若干多い状況である。さらなる底上げが必要だと認識している。

今回の本テストは、府下全小学校を対象にしていることから、府全体を分母として、本市の学力状況を把握することができ、本市の5年生は他の教科と比較して、算数に課題があることが見えてきた。今後、詳細な分析を進めて、手立てを行っていきたいと考えている。本市の小学校学力経年調査では実施していない教科横断的な問題、通称・わくわく問題と呼んでいるが、このわくわく問題の今年度の実際の問題の一つである。ぶどう農家の人との会話が記載されている資料と、甘さと温度の関係を表すグラフである資料の2つの情報を読み取り、ぶどうを冷やすと甘くなる理由を説明する問題がある。本市の正答率を見ると58.9%であり、府平均より若干下回っている。資料から正確に情報を読み取り、自分の考えを持ち、伝えること、いわゆる読解力や表現力に課題が見られている。これらの力は、子どもたちが今後、社会で生きていく上で必要な力であり、次期教育振興基本計画において重点的に取り組む必要性について、再認識した。先ほどご説明した、今年度の6年生における教科横断的な問題の結果と全国学力・学習状況調査の国語、算数の結果との相関を表している。2つのグラフからは、いずれの教科においても、高い正の相関が見られている。今後は、教科横断的に読解力や表現力を育成していくことにも、しっかりと取

組を進めていく。

児童アンケートでは、授業での活動、学校での様子、家庭での様子について問う質問があった。また、テスト等では測れない目に見えない学力、非認知能力について、目標に向かって頑張る力、気持ちをコントロールする力、人と関わる力の3つを、未来に向かう力として定義し、具体的な状況をアンケートで尋ねている。これらの分析結果をレーダーチャートで表すとともに、子どもたち一人一人が持っている良いところや、これから頑張るところなど、効果的な学習アドバイスをコメントとして、ウォッチシートと名づけられた個人票に記載し、返却されている。私も実際にこの個人票を見たが、子どもたち一人一人が自らの強みを知ること、2学期以降の学習意欲を高め、学力の向上に繋げていくことができると感じた。

8ページ以降に、特徴的な質問項目を3つ挙げている。1つ目は、人と関わる力に関する質問であり、自分と違う考え方の人と話をしている時、その人がどうしてそのように考えているかわかろうとする、である。2つ目は、好奇心に関する質問で、今までやったことのない課題にも喜んで取り組める、である。3つ目は、学びの方略に関する質問で、読んでわからなくなった時は、もう一度読み直してみる、である。これら3つの質問項目は、いずれも、大阪府平均を下回っており、児童アンケートと教科の正答率との間に正の相関が見られている。これらの質問項目は、これまで本市の小学校学力経年調査における質問紙の調査項目になかった質問で、非認知能力等の分析に有効な質問項目は、今年度の経年調査の質問項目に追加していこうと考えている。

続いて、昨年度の教育委員会会議においてもお示しさせていただいた、各種学力調査による学びの検証改善サイクルである。今回新たに本テストに参加し、実際の問題や、府教育庁から提供された資料及び学校現場からの声を聞くと、本テストは2学期以降の学習改善や授業改善に役立ち、本テストにより、短いスパンでPDCAサイクルを回すことで、よりきめ細かい指導ができ、子どもたちの最善の利益に資すると感じている。

続いて、今回のテスト結果を受けて、各学校がPDCAサイクルを回すために、教育委員会の支援としては、教育委員会事務局、教育センターでは学校訪問やブロック化による学校支援事業、学力向上推進事業など、学力向上関連事業を通じて、引き続き、各学校の課題に応じたきめ細やかな支援を行っていく。また、本テスト結果から見えてきた課題については、分析から伺える成果、課題と、改善のポイントについて、学力向上授業研修を通して、教員に周知していく。

今後の教育委員会会議の議論の進め方としては、この後、教育委員の皆様から質問や意見をいただき、次回以降の教育委員会会議において、本日の教育委員の皆様から意見を踏まえて、次年度の大阪府新学力テストの実施要領を説明するとともに、参加に向けて検討すべきことなど、意見をいただき、参加するかどうかを決定していただく予定である。いずれにしても、次年度の当該テストへの参加については、子どもたちの最善の利益に資するものになるよう、府教育庁と丁寧な連携、協議を進めるとともに、教育委員会においても、引き続き、十分に論議し、検討していただきたいと考えている。

質疑の概要は次のとおりである。

【平井委員】 算数については、大阪市と府は誤差の範囲ですね。算数が苦手な児童の誤答分析はどうなっているのですか。また、問題の設定についてはいかがでしょう。ジャンルや難易度の点はいかがだったのでしょうか？

【福山指導部長】 確かに算数の問題は、全体的に見ますと、文章問題が多くて、本当に単純な計算などはなかったもので、そのあたり大阪市の子どもたちは、まず読むところから入るといった問題については、少し課題があるのかなというようには考えております。

【平井委員】 大学の共通テストは、複数資料を読み取って正解を求めるものがあつたり、教科横断的な問題を読み解くものもあります。そういった部分との関連で問題分析を行い、指導法を研究した方がよいということ、もう一つは、国語との関係で、読解力を鍛えていくことが重要だと思います。

【福山指導部長】 この教科横断的な問題の正答率だけ見ますと、大阪府とほぼほぼ同一かなと思っているのですが、ただ、この正答というところの基準が、個人票を見ましても、○とか×じゃなくて、星3つとか2つとか1つということで、正答か正答でないかというのを、星3つで正答の子どもたちの割合が、府と市でどんな差があるのか、その辺の細かい分析をしていくと、もしかすると差が見えてくるのかもしれないなというように思っています。その辺の分析の仕方はまた検討していかなければいけないと思っています。

【平井委員】 エリア別の分析も行い、結果を教えてくださいと思います。教科横断的な問題は時代の要請に合うと思うのですが、作問で工夫がいるはずですが。他県の公立中高一貫校の適性検査型を見ていると、設立当初はよいものの、数年経つと問題が形骸化してくる傾向があるように思います。

【福山指導部長】 問題は、府教育庁が中心となって作っているところもあります。昨年度、問題検討のところには本市の方も入らせてもらったのですが、継続的に続けていくなれば、そういう問題の作成にあたって、形骸化した問題にならないように、我々としても、府教育庁と連携していきたいと思っています。

【平井委員】 教科横断的な問題というのは、今までの指導者の立場でいくと、経験があまりないから、教えるに難しいと思います。ですから、その傾向と対策というのを、ある意味で教える側が事前におさえておかないと、指導がうまくいかず、結果として、定着がはかれません。

【栗林委員】 平井委員の方からも指摘がありましたけれども、教科横断的な問題というのは、今まででしたら正解を求める、つまり、正しい考え方を求めるという、そういうのが問題で、その正しい結論に至る考え方はどういう考え方でしたかということの問題の狙いとしていたのです。今回の教科横断的な問題というのは、間違いをわざわざ問題の中に入れてあって、それをどう考えるのですかと、間違いは、なぜそういう間違いが起きているのですかということを含めて、要するに総合的な判断力を養うという、問題の例を見せていただくと、そういうことが言えるのではないかと思います。私の勤め先の職員と、生徒がこんな問題解けるかなと、冗談で言い合いしていたような、そういう経験がありますけれども、世の中にあるデータというのは、正しいデータもあれば、誤ったデータもある。そういうものが総合的にどう判断していったらいいのかというような問いかけも、これまでの単線的なそういう問題の出し方ではなくて、複線と言えるかどうかかわからないと思うのですけれども、そういう考え方が必要になっているという認識に基づいて教科横断的な問題というのを出されるようになってきたのだらうと思うのです。こういうことをやれば、ではどういう力が身につくのですか。今、我々、教育界で当惑を感じているのは、極端に、この新型コロナウイルスの騒ぎの中で、世界は一つだという、こういう認識に基づいて、国と国との変化というようなものを、一つの塊として皆が見るようになって、国と国の教育の差異とかというようなことも、非常に身近なものとして比較するようになってきているのです。その過程で、日本の学校教育というのは、日本の中で自分たちが自己満足していたような、そんな高いレベルを維持しているわけではないではないかというようなことがわかってきてしまって、そして、そういうことには、どう国全体として対応していったらいいのかということ、皆が当惑しながら対応していこうとしている。そういうプロセスの中であって、こういう教科横断的な問題というのを、どういう意味がある

のかということ、今、検証を始めたということで、これは、テストテストとって、反対だとおっしゃっていますけれど、こういうものをテストと言えるのかどうか。調査というように考えるべき種類のものではないかとも思っている、これはテストで学力云々というようなことまで、すぐに結論づけられるのかどうか。ちょっと私はまだ調査段階なのではないかというように考えられると思っているのです。そのPDCAというような段階には、まだこのすすくウオッチというのは至っている段階ではないので、子どもたちに、これはできた、できなかった、残念だね、できた子は良かったねというような段階というよりも、調査段階として、これからの世の中で身につけていく力はどうあるべきかという観点で、皆で調査していきましょうよという、そういう認識を共有していくことが大事なのではないかなと私個人は今の段階では感じているのですけども、これを統計をとって、すぐにできたとか、できなかったとか、そういうことにしてしまうのは、むしろまずいかなという気もするのですが、この点はどうなのでしょう。

【福山指導部長】 我々も初めて、このすすくウオッチを、子どもたちに受けていただいて、こういう問題が出るのだなということはわかりました。府教育庁もおそらく、この問題が適切なのかとか、どういう力をつけていくことが必要なのかということ、試行錯誤しながら、我々、市町村教育委員会とも協議を重ねながらやっていこうかと思っています。今回、子どもたちには、非常に詳しい個票が返ってきましたので、こんなものが返ってくるのかというのは、我々もそう思いましたし、現場の先生たちも、すごい資料が返ってきたねというのが、第一の感想なのです。ただ、じゃあそれをどういう方向に活用したらいいのかということは、まだ我々も現場も、これから研究していきましょうということで、ここも府教育庁と相談しながらやっていかなければいけないと思っているのですけれども、こういう形で来年度以降も参加し、この調査を継続的にやるならば、本当にめざすべき学力像はどのようなものなのかとか、こういう資料をどう活用して授業改善に活かすのかということも、これから検討していかないといけないというのが、我々の課題だと思っているところでございます。

【森末委員】 PDCAサイクルを回す、それがその段階に至っているかどうか別にしまして、それを回すという話であるならば、このウオッチシートで強みについて書かれていますね。これをもって、それが児童生徒の励みになるということはもちろん良いことです。ただ、これを授業にどう結びつけるか。何か、正直、結びつけようがないのかなと。家庭教師的に、個々の生徒に教えるのであればいけるかもしれないのですけれど、どんな具体

的なイメージで活用されようとしているのか、本当にそこをお聞きしたいと思ったけれど、今、検討すると言われたので、一番そこが肝だと思うのです。もちろん、その学校全体で他と比べたら少し劣っているとかいうので、少してこ入れしないといけないとか、そんなことはわかるのですが、個々の、あなたの強みがあったり、弱みがあったりして、個々の生徒に、あなたについてこうしますということができれば言うことないのですが、人的資源も限られていることですから、どうしたら一番いいのかというのが一番問題なので、そこは本当に検討していただきたいなと思います。もう一点、細かい点ですけど、このウォッチシートの記載で、今後、わかったら教えていただきたいし、わからないのであれば、それは今後検討していただきたいのですが、強みがありますけれど、弱みはないですね。元々これは、強みだけを書いているのですか。

【福山指導部長】 この資料の作り方も、実際には本当にどれだけ文例を持っていて、文例を組み合わせて作っているのかという、そのへんもこれから府教育庁に聞いていきたいと思います。どれぐらい個別に、本当に書いているのか、機械的に入れているのか、具体の作り方であるとか、また、弱みを入れていくのか、どうするのかなというの、まだまだこれからです。

【森末委員】 ウォッチシートは現時点ですでに配られているのですよね。

【福山指導部長】 はい。

【森末委員】 その具体例でいくと、褒めることが重視されて、それはそれで一つの考え方でいいのですが、読んでいくと、多少、この点、もしこんな場合は、こんなこと考えましたとか、ちょっと弱み的なことも書いているので、基本的には強みを書いて、学習意欲を高めようとしているのかなというように見受けられるのです。それはそれでいいのですが、そうすると、強みだけ書いていただいて、それをじゃあPDCAサイクルを回す時に、あなたの強み、これだからもっと伸ばしましょうとか。やっぱり弱みはこうだからこうしましょうとか。本当は具体的にやらないといけないのかなというのがあって、このシートの作り方も、もちろん強みを強調するのはいいけれど、弱みの方もある程度、明らかにした方がいいのではないかと。それはPDCAサイクルを回すために必要であれば、そのことも具体的に、提案していただいたらなというのが思います。もっと細かいこと言いますと、このウォッチシートのところで、正解の中でも素晴らしいものとか、星がキラキラ光っている3つ星があります。あと、正解は星3つで、もう少しが星2つ、見直してみようが星1つというのは、このウォッチシートの左下にあります。星がキラキラしている

ものは、正解の中でも素晴らしいものというのは、これは記述式で書いた時に、上手に書けたということを対象にしているのか、全体的に通してこうしているのか。ここはどうか。ちょっと教えてください。

【福山指導部長】 そのへんの採点基準もわかっていないので、これは聞いていかないといけないと思っけていまして、特にポスターの問題はどういう基準で、誰が何人で採点しているのかということも、我々も聞いた上で、このシートの使い方も検討していかないといけないと思っています。

【森末委員】 そのあたり聞いていただいて、またご報告いただけたらと思います。

【大竹委員】 二点あるのですけれども、まず第一点は、このわくわく問題、今回初めてということなので、40分で、大きくジャンルを分けると4つの設問があり、平均正答率でいくと、5年生が5.4問で、6年生が6.5問ということなので、要はこの分量と時間と内容が適切なのか。正解に至るか至らないかということと、どこまで問題に取り組めたのかというところは、初めてなのでこの部分も調べていただきたい。特にこれは文章を読んだものですから、ある程度時間がかかるので、そういう面では、これぐらいの分量、これぐらいの文章、本当に適切かというのは、ぜひ見ていただけるとありがたい。こういうふうに4問とも書いている人と書いていない人が、どれぐらいの割合でいるのかまで、ぜひそれは調べていただいて、次の問題の時の難易度なり分量というものも見ていただければありがたいというのが一点で、これは要望だけです。二点目は、このウォッチシートなので、すけれども、基本的には採点は委託業者ですよね。委託業者がどういうふうに採点しているかということから見ると、例えばサンプリングで同じような回答を見てきて、教師がもし自分だったらどういう採点をするかというようなことを一度やってみて、自分の採点の評価と、こういう委託業者の評価、今、議論があったように、こういう文例で、言葉を何種類か充ててしまえとなってしまうと、これまた乱暴な話になってしまう。大変な労力がかかるので、委託業者に出すということは、これはやむを得ないと思いますけれども、ぜひ、採点レベル、評価レベルが実際に児童を見ている教師とで、ある程度合っているのかどうかというのは、サンプリングか何かでも一度見てもらうというようなことをされたらどうかというように思います。以上の二点です。

【福山指導部長】 ありがとうございます。

【平井委員】 褒めることも含めて、児童一人ひとりの把握が必要ですね。

【福山指導部長】 率直な現場の意見を聞きますと、これはすごく詳しいのが返ってき

たので、「すごいのが返ってきたな」というのが担任の先生の第一の感想なのですけれど、これを一人一人、30人学級で30人分を読み込んで、一人一人がどうなっているかということ把握するのはなかなか難しい。

【平井委員】 現実的に難しいでしょうね。

【福山指導部長】 だから、その褒める時間をつくるかどうかというと、多分つくれていないと思います。

【平井委員】 要はバランスです。大切なのは事後だと思うのですが、ファシリテーターとしての指導を組み込みつつ、個別最適化学習につなげ、自学自習の姿勢を養わなければなりません。そのようにしていくためには、教員の負担減も鑑みると、データ分析は府で行っていただき、即、活用できるものにした状態で返却していただくのが理想です。業者任せにしておくのも問題ですからビックデータを集めて信頼性のあるテストングを行ってほしいものです。

【異委員】 重複するかもしれないのですが、このウォッチシートのところのフィードバック、コメント、何点かお話で出ていたのですが、ちょっとそこが引っかかるころでして、テストの点数とか量的なものは明らかになると思うのですが、こういう質的なところですね。フィードバックというかこの返答って、ものすごく慎重になると思うのです。まずこれは、誰がどのように返しているのかというところは気になるころなのです。私たちもやはりこういうような感じで、相談ではないですが、あなたもっとこうやった方がいいよって言う時って、その子の性格であったりとか、家庭の背景であったりとか、個別によって返答が変わってくると思うのですね。なので、これはAIが出しているのか、ABCDパターンがあって、この子はじゃあCでとかなのか。でも、子どもが目にするし、持って帰るので、おそらく保護者も見ますので、ここはどのようにしているのかというのは、明らかにしていただきたいなと思います。ただ学校で、これを一人一人、このコメントに対して次に繋げていくというのは、なかなか先生方も大変かと思うので、私だったら持って帰ったら、家庭のコミュニケーションの一つのネタというか、「こういうのが返ってきたのね」、「こういうところが強みなね」とか、「ここが評価されているね」みたいな形で、話がしたいなというように思うのですが、ただ、これが、本当に自分が思っていることと違ったりとか、本当に色々な家庭事情がありますので、その辺もきちんと配慮して書いてくれていることなのかというのは気になるので、ここは明らかにしてもらいたいなと思います。

【福山指導部長】 はい。ありがとうございます。

【山本教育長】 初めの参加の際に、色んな議論があったことを考えると、一回の参加だけで消化するのが、なかなか難しいというように私は率直に感じているのです。府知事の方から、大阪市がやったような経年調査を府全体でやりたいと言われ、それは市長時代に我々も、逆に我々の方からお願いをして、今の知事に予算つけてもらってやったことですから、悪くはない。だけれども、経年的にやる時に、時代の流れでしょうけれども、新しくこういう非認知的な部分も含めることや、国語と算数、理科については、5年生の段階での府と市の比較は、それを糧にして、1年間の学習の底上げをどう図るかというところで活用するのは、わからないではないです。ただ、今委員の方から出てきたような問い、それからどのような形で、各学校現場で意味のある活用をしていくのかということも考えながら、やはり実施者である府の方で、言ってもらわなければいけない。ただそれが1回の実施だけではわからないというなら、それは理解しないことはない。我々もまだ試行的に参加しているわけですが、その試行参加期間が長くなるので、期限を決めていただいて、府の方から責任ある評価というか、きちんとした分析結果とそれぞれの活用の仕方なりというものを出していただかないと、我々もまた考えていかなければならないのかなと思うのです。やはり、問題づくりから参画することを、きちんと保障していただくことと、とりわけ、わくわく問題の方については、府としての思いも含めて、分析と活用というものについて、一定の見解を出していただかないと、来年参加するかどうかというような時に、それを府が出すのは結構難しいかもしれないが、我々として前向きに改善点と言うけれども、府下全域でやりますというような形だけでは、詳細に分析というか、意見を交わした時に、しんどい部分出てくるよということは、きちんと府教育庁の方にも申し上げて、お願いしてもらいたいと思うのです。

まだ結論付けは今後ですけれども、今日色々、先生方から出た意見も含めて、これ府教育庁とのコミュニケーションの問題にもなってくると思うので、やって意義のあるものにしていくためにはどうするかということも、もう少し府教育庁の方でも、考えていただくようにということをお願いをしたいと思います。今日のところはこういう形で、一旦頂いた色んな点、また府とのやりとりもあれば、また次回以降、聞かせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(5) 山本教育長より閉会を宣告

会議録署名者

教育委員会教育長

教育委員会委員
